

# 教育を考へる

日本学術振興会理事長

木田 宏

今日までの臨時教育審議会の流れを考へながら、「教育において何を改革すべきか、改革すべき教育とは何か」ということについて考へてみたい。

誰でも、教育というと、△先生が生徒に教えること▽と考へておられる。しかし私どもは△学校で勉強す

ること▽と頭に入れてきている。だから、私どもの時代に教育のある人といへば、大学教育までを受けて学

士様になった人、という受けとめ方をしていた。教師が生徒に教えるという個人的側面は、教育の基本にあることは当然である。これには色々の議論があり、とくに教育学の先生

方は、洋の東西を問わず、△教師が生徒に教えるのが教育▽と考へている。

人間が大きくなるということとは、自然に発育し形成されていくもの。その中で、ある望ましい方向をもつて、教師がインセンティブを加えていくことで、子供がそれに対応して伸

びていく、それが教育だ。だから、  
“教育の目指す価値が、教育の目標  
に向けて教えていく”これが教育で  
あり、したがって、一個の人間の教  
育を考える場合も、その基本にあっ  
たと思われる。

ところが、それだけが教育かとな  
ると、仲々そうはいかないものであ  
る。本当に先生たちが教えたいのは  
“馬は水のある処までは連れていけ  
るが、水を飲むのは馬だ”というこ  
とと同じように、勉強をするのは子  
供自身である、といくら言ってみて  
も仕方がないという訳である。

教育学の先生方の中には、 $\wedge$ 教育  
とは、先生が教えるという側面もあ  
るが、より大切なことは、自分が勉  
強することであり、だから学習する

ことによって教育の成果が身につい  
ていく。教育ではなく学習なのだ $\vee$   
との議論も出ている。それが今日、  
表面に出てきている生涯学習という  
ことである。生涯学習という言葉が  
最初に出てきた時、そんな余計なこ  
とは止めてくれ、教育は学校で充分  
だ、学校を出たらもう考えたくない  
という率直な反応を沢山受けたこと  
があった。子供の頃から学習するこ  
ういうことは、大きくなって、生涯、  
学習していないと、ついていけない  
世の中になる、ということ、だか  
ら、生涯学習という言葉を考えてみ  
ると、単に誰かに教わるということ  
だけでなく、自分自身が勉強してい  
くということなんだ、という方向に  
現在は動いてきているといえる。

一方で、教育には、知識を頭に詰  
め込めばそれで良いのか。教育とは  
物知りになることなのか。ならば、  
機械や本に任せておけば良い。コン  
ピューターと優劣を競うのが教育で  
はない、という議論も存在している。  
これは昔からいわれていることで、  
教育には $\wedge$ 自分の存在を知り、社会  
の中の役割を果す $\vee$ ところまで、  
自分が解る人間にたかめていくもの  
である、というものである。  
各人に自覚を持たせることが教育  
である、ということになると、先生  
が教えるというのは、どういうこと  
だ、ともう一遍はねかえってくるこ  
とになる。あることを念願すると、  
本人が自覚を持つか、というと仲々  
そうはいかない。しかし、その一番

肝心な事が欠けているのではないかという議論は、実は、現在の教師たちも、十分に自覚しているようです。

国立教育研究所に在籍していた頃、全国の小・中・高等学校の先生たちに「いま一番力を入れて指導していること」について調査を試みたことがある。先生たちも体力をつけること」との回答が全般的に沢山あった。小学校の先生は、その次に「いづくしみの心を持たせること」、また中・高等学校の先生は「忍耐力」、「頑張る」というのが二、三番目にあつた。問題の「学力をつける」というのは小学校で五番目、中学で四番目、高校では三番目にあげられていた。事実、ある教室での話だと、△子供たちにとって、その教室の中

にどのような場があるのか、との理解がまず無い。先生はかつてに喋っているんで、自分たちには関係ない△という顔で、横を向いて騒いでいる、という声を聞きました。また、若い研究所員が非常勤講師をしていた頃の話として、△授業時間の前半は自分の方へ、興味を持たせるのに費やしてしまい、教えるのは後半の半分だけ▽ということを言っていた。

要するに子供たちは、教室内で何をすべきか、という理解が無い。基本的に、それは教育としては困ることであるが、それをどうやって教えるか、となると、これは大変なことになる。また教育はそういうことだけかというところ、決してそれだけではない。

今迄の教育は、教えるということだけを考え過ぎている。もっと、育てるといふことも考える必要がある、と仰言っている国際的にも権威のある先生がおられる。△子供は未来である」といった本も書かれており、若い母親には、胎児は胎内に入った時から、子供への対応を考えなければいけない、といった内容の著作も書かれた方である。

育つ、という子供の生命力に対して、親がその世話をしている、胎内に入った時から、母親の喜怒哀楽によつて、子供の動きが違ってくるというのが、最近の小児医学ではいわれている。そして、五感、五体を持つて生れた子供が、それを伸すためには、母親の世話という相乗作用が無

かったら、基礎が培われない。お乳

をやる時だけ、哺乳瓶が上から降りてくるような育て方では、言葉も感覚も五感も伸びない。その基礎がないから、第一反抗期で可笑しなことになるし、第二反抗期の青年期を迎えて、突拍子もないことが起つてくる。育てるということに手抜きをしている、という議論もある。

こういう話を聞くと、成程と思う。学校の先生が“体力から”“根気から”“いたわりの心”とか言うのは実は母親が、自分の子供を育てる時点で培われていなければならなかったことを、教室の場に委ねてしまっている、ということになる。しかも勉強は塾へ行く、といった始末になっている。ここいらから考え直さなく

てはいけないと思う。

次に環境が与える影響というのも見逃すことができない。“環境が人を育てる”という、その環境が、自然環境から広がっていくことが沢山ある。北極の子供、赤道直下の子供、山に住む人、海に住む人たちは、各々の自然環境に対応できる、生活の技といったものを身につけている。他に文化や宗教の環境にも大きい影響がある。また南北朝鮮の場合、同じ半島の民族であっても、政治が違うために、行動様式まで違ってくるという社会環境も存在する。

先日、中学一年の子供を連れて渡米していた若い大学教授の話聞いた。渡米にあたっては、子供が慣れ

親しんでくれるだろうか、と大変危

惧していたのだが、アメリカの子供たちは、違った奴が来たから、こいつの能力と力を合せて、自分も伸びていこう、という形で受けとめてくれる。だから子供の意志から、一年の予定を三年間に延長して、帰国してみたなら、日本の場合、これが大違いであった。入試のことなども考えて、二年生への編入の相談に、前に通っていた中学校へ行ったところ、クラスに違った年齢の子供が入ってくると、いじめの対象になってしまふ、という。それでは、言葉のことも心配で、三年に入れた場合、高校入試はどうなるのか、と聞いたら、二年生の実績がゼロだから、公立は何処へも入れない。しかし、私立な

らば、いろいろなタイプの子供がいるから大丈夫だろうという。冗談じゃない、貧乏教授には、私立へ行かせ余裕はない。息子にどうする、と聞いたら二年に行く、というので、子供の意見を尊重した、という話を聞いた。

一方で国際化の促進が言われている。とくに経済界の場合、世界で活躍する人材を要求している。ところが、核家族とかで、自分の子供は外国へは行かせたがらない。また外務省でも海外勤務を嫌がる傾向にあるという。そういう家庭環境というものも認識しなくてはならない。

高齢化社会に対しての教育というものが、日本にはほとんどない、私学の方には、子供たちの減少を気に

しておられるが、大人や年寄が一杯おられる。学校は、もっと広範囲な年齢の人々に、多様な教育の場を提供してもらいたいと思う。

学校というものが、社会の動きやニーズから、一歩離れて位置し、旧態依然とした考えでやっている、

社会はカルチャーセンターとか、塾といった、新しい教育の場を別の所へ求めていくことになる。我々の環境を造ることから、一人の間を造ることまで含めた、あらゆるものを変えていかないと、教育改革にはならない。臨教審が答申を出したから何か動くだろう、では改革にはならない。臨教審は皆さんと一緒に、各々の場を考え直していかなくてはいけないし、皆さんは、各々の場で

各々のやり方で考えていかなくてはならない。

自分にとって、一番必要なことをやっけていくことに努力していく以外、今の教育が荒廃している大きな問題の改善にはならないと考えている。

(本稿は昨年八月、名古屋で開催された「東海四県合同教育懇話会」の講演を要約したものです)